

全林研会長賞

愛知県

しんしろ林研クラブ

所在地 > 愛知県新城市

設立 > 平成18年12月

会員 > 男32人 女1人 年齢 > 31歳～85歳 平均68歳

主なプロジェクト

- ◆ 林業技術の改善および知識習得のための講習会・研修会の開催及び参加
- ◆ 施業意欲の低下している森林所有者への働きかけ、林況調査、情報提供等

山の見える化・山へのアクセスを生み出す ハンディ GPS 森林情報活用研修会

1. 地域の概要

私たちの活動している新城市は、愛知県の東部、東三河の中央に位置し、東側は静岡県浜松市に隣接しています。

周囲を山々に囲まれ、中央を豊川が流れ、長篠の戦いの舞台となった設楽原の決戦場や、日本の棚田百選にも選ばれている四谷の千枚田などがあります。



建設が進む新東名高速道路（右奥は新城市街）

年平均降水量は約2,020mmであり、流域の重要な水源地域となっています。区域面積は4万9,900haで、県内では豊田市に次いで2番目の広さです。森林面積は4万1,643haで区域面積の約84%にあたり、民有林の人工林率は約73%で、県平均の64%と比較しても高くなっています。

市内には、木材市場・製材工場・プレカット工場が併設された三河材流通加工センター（HOLZ三河）があり、木材の安定供給に貢献しています。

新東名高速道路の建設が進み、新城インターチェンジや設楽原パーキングエリアが設置されます。また三遠南信自動車道の建設が進むことにより、今後、交通の要所としてさらに発展が見込まれる地域です。

2. 平成 23 年度活動の動機

ある林研会員が、家族の所有する山林資産を継承していくために、息子さんと一緒に、いくつかの山林を回りました。

父親（林研会員）は、一通り山林を親子で一緒にまわり、山林の場所と境界を確認でき、山林の引継ぎは終わったと思ったそうです。息子さんはその後、記憶と図面などの資料を元に、一人で山林に行きましたがたどり着けなかったそうです。「季節が変わると山の中の風景も変わってしまい、山林の場所や境界も一度行ったきりでは分からない。……いつまでも父親に頼れない、どうしたらよいだろう。」と思ったそうです。

新城市の地域の問題として、過疎高齢化や不在山主の増加などにより、山林情報を「家族」内で共有・継承することが困難。

地域の山に詳しい人がいない。また、地域内で山の情報が共有・継承されない。

素人山主が増加している。

このようなことから、地域山林の管理・活用（財産管理・災害対策・獣害対策）が十分に行えないといったことが起こっています。

この問題への対策として、

他人と共有できない「個人」の経験や知識で裏打ちされる情報を、より客観的に把握でき、しかも誰でも使える方法で収集・管理・活用を行う。

緯・経度情報を基にする地理情報をデータで管理することなどが考えられます。

この会員から「ハンディ GPS というものがあるが、使い方を教えて欲しい。」と事務局に相談があり、「ハンディ GPS 講習会」を開催しました。

3. 活動内容



境界杭の位置情報をハンディGPSに登録する林研会員

第1回ハンディGPS講習会をしんしろ林研クラブの会員向けに開催しました。

内容は、ハンディGPSの紹介、基本操作を説明したのち、現地山林において、境界杭の位置情報の登録。また、既にハンディGPSに入れてある位置へ移動するナビゲーションの研修を行いました。

第2回ハンディGPS講習会では、林研クラブの会員が森林所有者、林業事業体を対象として開催しました。こちらはGPSの説明をしたのち、現地山林において、風倒木が発生した範囲をハンディGPSを活用し、面積を測る実習を行いました。

4. 成果

ある地区では、森林環境税の事業境界の確認作業で試用したり、台風で荒れた林道の災害報告用のデータを作成するため、林研クラブ会員がハンディGPSを活用し、図面へ位置とそれに関連する写真を添付し、復旧の要望に利用しました。

中学校向け森林整備体験事業でハンディGPSの紹介をし、地元の次世代山主にハンディGPSの存在を伝えることで、今後の山主の不安を軽減させる取り組みにも発展しています。



ハンディGPS講習会に参加した森林ハンディGPSについて説明する林研会員組が山林の位置や境界をデータで森林所有者(組合員)へ提供する新たなサービスを開始しました。

個人でハンディGPSを購入し、マツタケの「シロ」を管理する人も現れました。

ハンディGPS講習会の開催の動機となった、会員はその後、カメラ付きの

ハンディ GPSを購入し、所有する山林の境界（杭やポイント）の情報を登録しています。しかし、データをパソコンへ移動させて、地図上へ表示することができません。また、息子さんは山林の位置情報は知らないのに、ハンディ GPSを持って山林へ行くことはできませんが、パソコンへGPSの情報を入力することはできます。

このようなことから、父親が山林の情報を現場で収集し、息子が山林情報を管理することで、山林の管理を通じて、家族の絆を深めるきっかけになっているようです。

また、地元の山の指導者が、新たな山主と山林とをつなげる方法を開発し、その技術を伝えることにより、山の管理を通じて、次世代の山主と、地域との絆を育てていくことが期待されます。

5. 今後の課題

(1) 高齢者のIT機器の活用方法

山林情報の収集をしやすくするため、操作しやすい機器の選択、マニュアル等の作成、地域内の技術支援者の養成など行うことが考えられます。

(2) 地域内森林情報の管理

収集した森林情報をいかに管理していくか、地域内情報管理者の育成、地域外情報管理者との連携（森林組合・NPO）、情報の管理・利用の「約束」を構築（個人情報対策等）、行政との連携などが考えられます。

(3) 行政との情報連携

収集した森林情報を活用していくため、市・県（森林林業・土木建設・農政・環境等）への働きかけ（講習会等への参加働きかけ＋事業提案等）、行政管理GISとの連携していけると良いと思われます。

6. まとめ

今回使用したハンディ GPSでは、誤差が数メートルから十数メートル程度あり、正確なものではありませんが、全く分からなかった山林の位置を、一度行って位置情報を登録することによって、次回からはそこへ一度も行っ

たことがない人でもナビゲーションして行くことができるため、山林資産を継承していくことに活用できることが分かりました。

今後、準天頂衛星初号機「みちびき」が運用され、精度が向上したハンディGPSが安価で発売されることが期待されます。